

令和七年五月吉日初版作成

神への信と人類愛を深める

高嶋善三郎

目次

- 潜在的に天命を果たそうという意識・・・・・・・・・・・・・3
- 地球人類が完成されていく今・・・・・・・・・・・・・3
- 愛と調和の世界にするための留意点・・・・・・・・・・・・・4
- 愛することの意味・・・・・・・・・・・・・5
- 神への信を深めるための留意点・・・・・・・・・・・・・5
- 横に働く、隣人愛、人類愛を深めるための留意点・・・・・・・・7
- 地上界に神界の愛を現わす・・・・・・・・・・・・・9
- (付記) 霊界からのメッセージ・・・・・・・・・・・・・10

お願い

既に作成した資料(バックナンバー)は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせします。

(スマホ) 090-3346-6619

(メールアドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

潜在的に天命を果たそうという意識

私は、過去の悲しいこと、しつらいことが、何かにつけ思い出されて、心から離せない。過去には楽しいこと、喜びに満ちたことがあったのに、もかかわらず、そうなってしまう。どのようしたら、この状況を脱することができるのでしょうか、というご質問を受けました。

これについて、整理していこうと思います。

これと同じ問題を整理したものは、『過去』すべての苦悩を天還元する』今ここ』に意識を集中する、があります。今回は別の視点から整理したいと思います。

結論から言えば、このような状態が起こるのは、私たちがこの肉体界を愛と調和の世界にするために天下ってきたのにもかかわらず、そこを忘れていくからであり、潜在的に天命を果たそうという意識が働いているためと考えられます。

別の言葉で云いますと、この肉体界を愛と調和の世界にする天命を授かった、宇宙神の分身たる私たちが、乗り越えるべき場であり、対象で

ある、トラウマや失敗などと表現される事象は、光と一体であった時には、容易に光に変容できたのですが、自分の光により崩れてゆく未開の肉体界の想念の、不安と恐怖に怯えている闇の姿を自分自身だと認識したため、消えてゆくべき闇の姿の想念と同じように苦しんでいる自分から、自分を見つめている状態といえます。

それでは、どうしたらよいかといえば、自分の光により崩れてゆく未開の肉体界の想念の、不安と恐怖に怯えている闇の姿を自分自身だと認識したことをあらため、人間神の子観を取り戻すことなのです。

即ちそれは、自分の内なる神聖を認め、それを活性化し、神聖の光を自分の身体から放つことなのです。

地球人類が完成されていく今

ここで、私たちがこの肉体界を愛と調和の世界にするために天下ってきたことについて、五井先生はどのような解説をされているかをみてみましょう。

「宇宙にはいくつもの星座があり、数多くの星がある。そして、宇宙

心の大調和の心は、次々と星々の世界を調和した世界に仕上げているのである。そして現在は、地球人類が完成されていく順番になっているのである。

しかし、地球という物質体ができあがり、そこに肉体を纏った人間が生まれ、本来の霊質の地球や人間が、物質体になったためマイナスが、いわゆる業と言われ、原罪といわれる、人間の不幸、災難のもととなる波動なのである。これも大宇宙の無限のひろがり、無限の進化の一齣（こま）としてのあり方であり、霊質が一度び物質体となり、そして物質体を持ったまま、しかも霊質と同じような働きのできる状態にまで進化してゆくことになるのである。

その途上に今はある。この地球人類もそういうわけで、宇宙心のみ心そのままの生き方がやがてはできる時がきて、はじめて地球天国が出来るのであるが、その途上の今日では不幸や災難が、霊質と肉体とのギャップの現れとして、出てくるのである。それは個人にも国家、民族にも現れてくるが、この不幸や災難を肩代わりしてくださる、守護の神霊が私たちの背後にあり、できる限り、不幸災難を防いでくださるのである。

であるから、肉体人間側としては、常に守護の神霊に感謝し続けて、

自己の想念を、不幸や災難の波の中から、光明波動の中につつしかえて置くことが必要なのである。そうすると、守護の神霊が守りやすくなり、不幸や災難はより少なくなってくる。国家や民族の場合も同じことであり、どれだけ多くの方が、守護の神霊への感謝で生きているかが問題になってくる」（『人類の未来』183ページ）

愛と調和の世界にするための留意点

私たちの天命である、この肉体界を愛と調和の世界にしていく上において、私たちが留意すべき点について、先の言及された、守護の神霊への感謝ほかに、次のように解説されています。

「地球人類が、大国の活動にだけ任せ、そのいうがままに動いているようではいけない。武力なき国家民族こそ、地球人類の救世国、救世民族となり得るのである。どうもがいても、外面的には他の大国に従属するしかない、ということとは、もはや内面的にのみ活路が開け得る、ということになるのであって、内面の世界、神界につながる唯一絶好の機会なのである。日本などは、さしすめその機会をもつ国の一つである。

日本こそ、内面の世界（神界）を祈りによつては現わし、神霊研究に

よって、他世界を発見し、その力を十分に応用しなければならない国なのである。

人間は自己の内部に神の国を持つものなのである。人間の生命は内部の国から、肉体世界に流れ出ているものである。人間が肉体だと思っている以上、この理がわからない。」「『人類の未来』19ページ）

これは、別な言葉で云えば、人間の内側にある本心（神聖）を認め、それを輝かせることと言えます。

愛するじいの意味

私たちの天命を完うさせていく上で、最も重要な概念である愛について整理してみましょう。

ここで、改めて自他一体の心である、愛について『宗教問答』問80「悟ることは全く感情がなくなるのですか。」「から整理してみましょう。

「愛とは、明るいつばわねのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力である、光が分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となる。

愛は光そのものであるから、電流が電球を通さないと光を現わせないのと同様に、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となって、愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまいが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたしたときには、その感情は光となって、相手を照らし、人類を輝かすのである。」「

神の愛を容易く現わすことができないのは、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたすことがなかなか難しいからと言えます。

この課題を解決するには、感情の波を超えて、その感情を純化していくほどの、強力な生命の根源の光をこの肉体に降ろすことがなによりも必要であります。これを実現するために、大神様から世界平和の祈りのみ教えが降ろされたと言えます。

神への信を深めるための留意点

光が分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方には、縦に働くと神への信となるあり方と、横に働くと隣人愛、

人類愛のあり方の二つありますが、まず神への信を深めるには、どのような点に留意するべきか整理してみましよう。

神への信を深める究極のあり方が、神我一体観であり、その神我一体観が深まれば、直観力を取り戻し、さらに高度な神通力をものにしてゆくには、神我一体観を深めることが不可欠です。そこで、神我一体観を深めてゆくのに参考になる留意点について、五井先生のお言葉から整理しました。

神我一体観を深めるには、全託の心を身につけることが必要です。

まず、**第一に神は愛であって、人間を絶対に損なうものではないと信ずる**こと。今この地球は次元上昇するために、過去人類が発した、ためにたまった誤てる想念が、いろいろな苦悩の出来事となって現わされ、不安恐怖とともに消されようとしている。その不安恐怖に流されないで、それを光に還元してゆく原動力は、この神の愛を信することなのである。

第二に、この宇宙万有、すべて肉体人間自身の力で創ったものではなく、いかなる生命といえど自然に創られてゆくものとあることを、よくよく考えること。イエスの云う「汝等のうちだれか思い煩いて身の長(たけ)一尺を加え得んや」の真理を知ることである。

別の言葉で言えば、分別することにより、焦りや心配になり、肉体頭脳の小智才覚をめぐらさないということである。常に本心に想念を合わせることである。そうすれば、大宇宙の法則に乗って生きてゆける神の叡智を受け止めることができるのである。

第三に、神はすべての智慧なのであるから、一人の人間でも決して無駄に創ることはない。であるから何人も天命(神の使命)もってこの世に生まれてきているのである。その理を信じて、現在自己の置かれている立場で、一心に神を思いながら、その仕事に励むことである。

第四にどのような運命の中にあっても、運命それ自身が今の自分ではない。今の自分は神の中にあると強く思い、人事を尽くしてゆくこと。運命や環境が悪いからといって今の自分を嘆き悲しみ、責め卑下することも、また運命環境がよいからといって、感謝こそすれ、自惚れたり威張ったりすることもいけない。それはみな消えてゆく姿なのである。

第五に、神を求める想いは純粹でなければならぬ。自己の本心(仏性)開発の為に神を求めることを怠ってはならない。神秘にひかれ、神霊界のあり方に興味をむけたりすることは、宗教の道に入った人としては当然なことではあるが、それはあくまで、この肉体界に基盤をもつてなされるならぬこと。この肉体界から足を浮かして、宙ぶらりん

の状態で、ああ、神様の姿を拝した、光明世界を親た、神の声を聞いたなどと、そうした神霊現象ばかりに把われていたのでは、この肉体世界の生活が崩れてしまい、せっかく神霊界に開かれた道が、かえってその人の仇になってしまうのである。(宗教問答問2「全託の心はどうしたら出来ますか。」「老子講義」(第一、三十、三十四講)、『如是我聞』187)

横に働く、隣人愛、人類愛を深めるための留意点

次に横に働く隣人愛、人類愛のあり方で留意する点を整理してみよう。隣人愛、人類愛のあり方は自他一体の心、愛を深めるという表現で整理されています。

まず私たちには、もともと愛を深めることができる、神の働きを内に持っている、解説されています。

「神は大生命であり、大霊である。この大霊が、七つの霊に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直霊という。この七つの直霊が各自のいのちを働かし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしている。」

この七つの直霊から、分霊が生まれ、その分霊から又分霊が生まれているが、その分霊たちは、いずれも、七つの直霊の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分霊がそうした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍している。

例えば、紫の働きをもつ直霊から生みなされた、紫の特色をもつ分霊は輪廻転生を繰り返しながら進化向上の道をたどっていくその過程においても、本来の特色である紫の本質的働きは変わらないが、その特色は内に隠されて、今生においては補助的働きの一つである青の要素を強く表に現わしているかもしれない。しかし人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、その時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直霊に帰一していく道をたどっていく。

そうした神の働き、光の輝き、生命の働きを、人間各自は、自己のうちにもっているものであって、この生命の働きを、天命通り、天の使命通りに働かせ得る人、運用出来得る人を神の使徒といい、自己の運命を完成させた人といい、天命を完った人、という。『白光への道』71ページ)

次に、「愛は執着の想いを伴いやすく、愛の心の流れが、把われの想いで、一いつじつ、一いつ想いに止まってしまい、愛することが苦しみとなり、愛されることが重荷となり、神のみ心を離れた、神のみ心の中にはない、消えてゆく姿的な業想念波を巻き起こして、そこに不幸や悲劇が生まれている。」と指摘されています。その箇所が『愛・平和・祈り』に次のように解説されています。

「愛の心は、思いやりというふうにも現われるし、寛容・赦しというふうにも現われる思いやりの心は、愛の心が細かい心遣いになって、相手の想いの波に同調しながら光を入れてゆへ、ということでは、こちらから相手の心の中に入ってゆへ。寛容の方は、相手の心の波、想いの波を、こちら側に受け入れて、自己の心の中で昇華をせよということである。この二つの心があわば、たいがいの方は、その人に好意を持ち、その人の愛の心を受け入れる。」

しかし、この地上界には神界の愛という心がそのまま現われていないと言われているのです。どのように現われているのか。

「これは、普通、愛と簡単にいわれているものは、ほとんどもが、業想(因縁)と業想念との融合によって行われるか、業想念の自我欲望の満足な愛を思い遣えているからである。つまり執着、執愛、自分の生命を縛

り、他の生命を自我欲望のために縛りつけてしまっているからである。別な言葉で云えば、純粹なる愛(神)の行為が、直接その光のままに行われる時には、肉体人間にとって、あまりにもその光が強すぎ、峻厳すぎるのを、適当に薄め弱めてこの地上界の肉体人間に適合するようにしてゆへところが情であるが、この地上肉体界は現在では、神の心と業想念の二つが入り交じって出来上がっている世界なので、情ということでは、愛(神)の面と、業想念(執着)の面との、どちらにも働きかけてゆへので、うっかりすると、愛情だと思っている行為が、いつの間にか、業想念という執着の方に流れていつている場合があるからである。」

このようになってしまつのは、愛する、ということが、光を他に与えることである、という神のみ心、つまり原則を知らないから起こっている。また、愛されたいのに愛されないのは、自分が相手を愛さないからだということ、その人は頭で知っているかもしれないが、心ではわからないからである」と五井先生は指摘されています。

さらにまた感情移入だけでは真の愛とならないことを理解するのことが大切です。

「人は、当の本人自身の苦しみだけでも十分であるのに、家族や友人など自分の周りの苦しみまで背負い込んで苦しんでしまう。感情移入によって共に苦しみ、共に喜び、共に分かち合うべきと勘違いしてしまい、正しい愛の現わし方（光を与え合うこと）ができなくなるのである。」それはなぜかという点、「感情移入した分だけ、自分の生命エネルギーを無駄遣いしているのである。周りの苦しみから自分を切り離すことができたなら、自分の新鮮な、迷いのない生命力溢れたエネルギーが愛の心となって、癒しの心となって向けられ、いつまでも解決のめどがつかなかった苦しみに別れを告げ、もう永遠に、苦しみ、悩みに追いつまれないことがなくなり、その瞬間から真理への目覚めが始まり、それ以上苦しまなくても済むようになるからである。」のお言葉のうちに、周りの苦しみから自分を切り離すことが、解決策になるからです。

地上界に神界の愛を現わす

神への信や自他一体化の心・愛を深めていくと、どのように私たちは現実的に変わっていくのでしょうか。

「自己中心の感情、即ち業想念感情はないが、他の人の感情は人一倍

感じ得るがその感情に執着せず把われずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得るようになる。別の言葉でいえば、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得る人、つまり、その人の一挙手一投足が、神の子の本質である、愛と真の人となる」（『宗教問答』問80 悟ると全く感情がなくなり、木石のごとくなるのではないかという人がいますが、悟りと感情についてご説明下さい）といわれています。

愛のあり方を正しく理解できるようにになると、すべてを喜びとして受け止められるようになるのです。

「真理に目覚めていない人は、なんでもかでも自分の悩みや苦しみにして受け止めてしまいが、真理に目覚めた人は、何もかも喜びとして受け止めてゆくのである。そこに人生の明暗の分岐点がある。なぜ喜びとして受け止めることが出来るのか、それはいつも必ず自分の心身と神と一体化しようとしているからである。無限なる愛、無限なる喜び、無限なる能力、無限なる幸せにならんとして努め、自分の肉体を神の光輝く器にしようとする喜びに溢れているからである。」（『美先生の書』『真理

— 苦悩の終焉』—

(付記) 霊界からのメッセージ

喜多良男氏の話(著書『死帰』)によると、霊界にいる分霊が、この肉体界に記憶を失くし、生れてきたのは、利他愛を深め、霊的成長するためである。霊界では、霊位の同じ霊人同志しか暮らすことが出来ない。ので、お互いに利他愛を深め合えない。ぬるま湯的世界。この人間界には、自分達より、低い霊位の霊人も降りて来ているが、自分達よりはるかに霊位の高い霊人も降りて来ており、いろんな刺激的な体験でき、自他愛を深めることができるからだということです。

そのため、各自それぞれ自他愛を深めるための計画を立てて自分の両親を選んで生まれてきている。しかし、この人間界に生まれてきた霊人たちは、自我欲に把われ、当初の計画を満たさせないまま、元住んでいた霊界から地獄界に落ちていく霊人が多くなってきていると、霊界の現状を報告してくれています。

霊的成長するためには、どのような心がけをすればよいかということ、次のようにアドバイスしてくれています。

一、人間は霊的には最低レベルの存在である。限りなく所有したいという物欲、際限のない性欲や食欲、他者を支配したいという権力欲を、霊的な視点で捉え直すことこそ、霊的成長の意味である。

二、自分五十年前に臨死体験をして以来、何度も霊界と肉体界間を行き来している、自分の幸せや家族の幸福だけではなく、他人の幸福のために無償の愛を捧げることこそ、霊的成長の意味である。

三、「霊的眞実」を一人でも多くの人に伝え、「霊的眞理」の内容を自分だけのものとどめず、できるだけ多くの人々に分け与えること。

四、人生の中で遭遇するさまざまな苦しみや困難こそが、実は霊的成長を促す、得難いチャンスであると捉えること。

様々な失敗から学び成長する処として人間界はつくられている。私たちは失敗を恐れず、人のためになると確信することを実行すべきである。

霊界の(指導)霊たちは、人間の心の中を見通し、心の動機と目的を見抜いて、心の重要さに応じて、霊界から援助や指導を働きかけている。

霊的視野を身につけることによって、霊的楽天主義が可能となり、それが身につくと、人間が陥りがちな杞憂や余計な取り越し苦労、恐れや悩みから解放される。全ての出来事が自分の成長にとって欠かすことのできない善きものと受け止められるようになること、教えてくれている。

私たちがすべての物事について、原因結果だけでなく、一瞬一瞬のフロセスに愛を注ぎ、感謝を注ぐことが、「霊的成長」する上において、極めて重要な要件であることをあらためて知らされる話です。